

図書だより

第57号
平成27年7月7日
呉工業高等専門学校
図書館
<http://www.lib.kure-nct.ac.jp>



休山からのマリノ大橋（撮影：呉高専 卒業生）

目次

・ 平成26年度校内読書感想文コンクールの表彰式	2
・ 第11回校内読書感想文コンクール		
最優秀賞		
「下町ロケット」を読んで ー主人公の夢を諦めない姿勢に触れてー	E1 藤原 棕柊	3
「デミアン」を読んで ー嘘を通して強くなる人ー	C2 山下 すみれ	4
「中学生の満州敗戦日記」を読んでー	M3 宮原 聖	5
優秀賞		
1年生の部	M 元木 太河 C 牛尾 幸航 A 石塚 仁奈 A 井上 咲	6
2年生の部	E 田北 人士 C 大室 ひな A 難波 宗功 A 前本 将志	10
	A 松本 華澄	
3年生の部	M 三浦 純 E 由良 和大 C 三浦 佑輝 A 茂木 友寛	15
4・5年生の部	C 吉本 海	19
専攻科生の部	ME1 都田 智大	20
・ 行事報告	平成26年度第1回ブックハンティング	
	学生会 文化環境副委員長 渡邊 優樹	21
	ブックハンティング図書紹介	24
・ 編集後記		

平成26年度 校内読書感想文コンクールの表彰式

平成26年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、校長室でおこないました。最優秀は、以下の通りです。

1年電気情報工学科	藤原 椋柊
2年環境都市工学科	山下 すみれ
3年機械工学科	宮原 聖

読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で第11回になります。学生は、

- 1年生：芥川賞・直木賞受賞作等の課題図書
- 2年生：教員の指定した課題図書
- 3年生：ノンフィクション作品や評論など現代社会に関する本
- 4年生以上：小説、評論、ノンフィクション、エッセイ等問わない

と、指定された本を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。選考は、本校教員が行いますが、学年によっては、名前を伏せた上で学生の感想を聞くという、学生による評価も行っています。

最優秀賞の受賞は、前回は男子学生だけでしたが、今回は、男子学生2名、女子学生1名という結果になりました。次回もたくさんの作品の応募があることを期待しています。



第11回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

下町ロケット

池井戸潤 著

電気情報工学科 藤原 椋柙

「下町ロケット」を読んで

— 主人公の夢を諦めない姿勢に触れて —

「仕事」とはこういうものだろうか。私は、生活費を稼ぐために行うことだと思っていた。しかし、「下町ロケット」を読んでからは、「仕事」の印象ががらりと変わった。

なぜ「下町ロケット」を読んだかという点、ドラマの「半沢直樹」が好きだったからだ。この原作本を書いたのが、池井戸潤さんだ。それから、池井戸潤さんの本を読みたいと思い、この本を読んだ。

主人公の佃航平は、宇宙科学開発機構の研究者だ。物語は、佃が開発したエンジンを搭載したロケットを打ちあげるところから始まる。しかし、エンジンの異常により、ロケットの打ち上げは失敗する。佃は責任をとって、研究者の道を諦めた。そして、家業の町工場・佃製作所を継いだ。最初は、製鉄開発で業績を伸ばしていた。ところが、様々なことが起こり、佃製作所は創業以来のピンチに陥る。そのピンチを社員全体で乗り越えようとする物語である。

この本の中で印象に残ったのは、佃製作所が様々なピンチを乗り越えていく場面だ。まず最初に起きたのは、京浜マシナリーという会社のキーデバイスの内製化方針だ。これにより、佃製作所との取引を打ち切られ、赤字を避けられない状態になってしまう。そのせいで、資金繰りに

も苦しむ。プロローグの後ここから始まったので、私は驚いた。この苦しい状況の佃製作所に、さらなる追い打ちをかけるように、大企業のナカシマ工業が特許侵害で訴えてくる。ナカシマ工業は、法定戦略を使って、佃製作所を買収しようとしていた。この場面を読んだとき、私は、大企業ということを使って、中小企業を潰そうとしたナカシマ工業にすごく腹が立った。それと同時に、これが企業の現実なんだなと少しショックを受けた。この辺りから、段々と佃に感情移入していき、気づけば佃製作所を応援していた。訴えられた佃製作所は、元ナカシマ工業顧問弁護士神谷弁護士を雇った。そして、ナカシマ工業を別の製品の特許侵害で訴え返した。こうして、見事に訴訟に勝ち、和解金を獲得してピンチを脱した。この場面が一番印象に残っている。私はこの場面から、仕事の厳しさを知った。でも、仕事仲間のありがたみを感じる事が出来た。

物語はここで終わらなかつた。佃製作所は、長年かけて、水素エンジンを開発していた。その特許を使用させてくれと、大企業の帝国重工が交渉に来た。帝国重工は、ロケットを飛ばすためのエンジンとして水素エンジンを開発した。しかし、佃に先を越されてしまった。だから交渉するしかなかった。ここでも、仕事の厳しさを痛感した。どれだけのすごいものを作っても、違う人に少しでも先に作られてしまうと、後の人は全く評価されない。その厳しさを深く知った。結局佃は、自分の作ったエンジンでロケットを飛ばすという夢のために、あえてリスクの高い部品供給を選んだ。この場面を読んで私は、仕事というのは、単に金を稼ぐためではなく、自分の夢を叶えるためにあるお金に換えられないものだと思った。

私は、今まで一度もはつきりとした夢を持つたことが無い。やりたいことはぼんやりとあるが、それを明確に出来ない。だからこれからどうしたらいいかも分からない。そんな私を変えてくれたのが「下町ロケット」だ。この本は、私の仕事に対する印象ががらりと変えてくれた。さらに、夢に向かって諦めずに努力を続けることの素晴らしさを教えてくれた。だから私は、この呉高専での5年間でやりたい事を明確にしたい。そして、それに向かってしっかりと努力を続けたい。

2年生の部

デミアン

ヘルマン・ヘッセ 著

環境都市工学科 山下 すみれ

「デミアン」を読んで

— 嘘を通して強くなる人 —

嘘をついてしまった。きっと今生きているほとんどの人が経験した、後悔の一つにあるだろう。例え、それが人の人生を狂わせるような大きな嘘であっても、「冗談」と言う言葉で片付けられるような小さな嘘であっても。

この本に出てくる十歳の主人公、シンクレール。彼もその一人、小さな嘘をついたはずだった。そもそも、彼がその嘘を付いたのには理由がある。

彼は、裕福な家庭、愛と厳格ある父母の元で育った。ある日、父親が酒飲みで、貧乏な家庭で育った強く荒々しい十三歳の少年、クローマーが、彼の仲間に加わった。クローマーは、武勇伝やいたずらを自慢し大言壮語し、友人らはおおびらにクローマーの味方をした。

自分の身なりやしつけが、彼らの反感をそそっていると感じたシンクレールは、おおげさな泥棒の話を考え出し、自分自身をその主人公にし、彼らに語った。それを警察に訴えてやるとクローマーに脅されたことから、彼はクローマーへの恐怖心と、嘘をついてしまったことの罪悪感と家族への後ろめたい気持ちからの苦しみを味わう。

私も嘘をついてしまった時、シンクレールと同じように、一人でいる時間より最愛の家族といる時間や、その家族に慰められた時にありがたさを感じて、逆に罪悪感で苦しくなったことがある。

この本が伝えたいことは、自分で自分を許してあげること、そして「自分」を持つこと、この二つだと私は思う。嘘をつく時、それはその場や状況から逃れた時、見栄を張らないといけない時、そして誰かを守る時だ。シンクレールには前二つが当てはまるだろう。人には一生のうちどうしても、嘘をついてしまう事があるはずだ。しかし、それが人の為であっても自分の為であっても、必ず後悔と苦痛が付き物だ。自分の嘘に押し潰される前に、後悔し、後ろめたさと苦しみをしっかり味わった後は、自分で自分を許してあげること。そして、見栄で自分を守る為の嘘を付かなくて良いように、自分は「自分」と思えるようになること。「自分を見つけ、自分を生きる」ことが、この本から読み取れる最大のメッセージだと思う。

私は小学生の頃、一人で行動することを恐れ、自分の気持ちより同調することを強く大切にしていた。当然、友人からは私が何を考えているのか分からないと言われたこともあった。中学生になり、私はある人との出会いで自分の意思を伝える事とその伝え方を知った。高校生になって、ようやく不器用ながらも、自分の意思が言えるようになった私がこの本を読んだ。過去の自分の経験と重ねて苦しい気持ちにもなったが、自分の意思が伝えられるようになったことにうれしさも感じた。そしてまだ人の意見に合わさないと恐いと思う私もいることに気付いた。これからの学校生活、友人や部活動での経験を通して「新しい自分」を見つけ、自分は「自分」と思える強さを身に付けたいと思う。そして、私が社会に出て、自分の意見を問われた時には、「自分」の意思を迷わず伝えられる、私でありたい。

3年生の部

中学生の満州敗戦日記

今井 和也 著

機械工学科 宮原 聖

「中学生の満州敗戦日記」を読んで —

私はこの本を読んで、満州で過ごした作者の幼い頃の経験に衝撃を受けた。

私は平成生まれのため、もちろん戦争に参加したことはないし知らない。たとえ起きたとしても、それは世界のどこかであり、テレビの画面の向こう側のでき事だ。平和な日本からは程遠い存在である。だからこそかつて日本が戦争をしていた頃の実体験をもとに書かれたこの本は非常に興味深かった。

あらすじを簡単に述べると、今から六十年近く前、満州国で暮らしていた当時中学生の作者が、日本の敗戦によって国の本当の姿があらわになる中で生きていく話である。

作者のありのままの体験談なので、教科書で知る「第二次世界大戦」やその後の「日本降伏」という単なる言葉ではなく、その言葉の裏で、必死に生きようとしていた人々の姿が見えてきた。さらに戦争が終わった後も、作者のように満州に住んでいる日本人は母国に帰るべく、ソ連軍や中国人の略奪や暴力にたえながら、数少ない衣服や家具を売り、「引き上げ金」を稼いでいたのだという。戦争が終わってもその傷はすぐに癒えず、時間がかかったようだ。

この本を読んでいて特に印象的だったのは親の子どもに対する思いだ。息子を死の危険にさらしてしまっ

たことに責任を感じ切腹しようとした父親がおり、娘を守るためにソ連兵の銃口の前に立ちふさがった母親がいた。ノンフィクションだからこそ感じさせられることは多かった。

この本には「民族的DNAなどは存在しない」とあり、その通りだと思った。敗戦後満州にいる日本人への虐待は凄まじいものだったと聞いたことがある。しかし、作者は本文で、そういった人々を「民族」や人種でひとくくりにはしてはいけない、国家政策や社会体制が非難されるものであり、そこで生きる個人とは区別する必要がある、と。実際に敗戦後の混乱を目にしながらこのような考えを持てるのは、その例外にあたるやさしい人々を知っていた作者だからこそ、偏見に溺れなかったのだと思うし、素晴らしいことだと思う。

今日、日本は近隣の国と絶えずめめあっている。ここで相手の国の全体を否定してはいけないのを分かっているながらも、どこかで非難してしまう自分がある。

「一つの民族の中にも多様な種類の人間がいるという発想の欠如が、無用、不毛の流血を生む」という本文の言葉を思いだしつつも、マスコミやテレビにすぐ流されてしまう自分自身に少し悲しくなった。

私は本を読みすすめ、最後の一文に目を止めた。『「満州国」の経営に無残な失敗をした指導者たちの名を、ふたたび、私たちは戦後の日本国経営の指導者たちの中に見出すことになる。』私なりの解釈とすれば、二度目のあやまちを今の日本がおこしつつあることを暗示しているのではないかと思う。

戦争の悲惨さとともに、これからの日本のありかたについても考えさせられる本だった。

優 秀 賞

1年生の部

地獄変

芥川 龍之介 著

機械工学科 元木 太河

「地獄変」を読んで

娘の不条理な人生に触れて

この物語は、堀川の大殿が絵師である良秀に地獄変の屏風を描くように命じた、その後から始まります。堀川の大殿は、大威徳明王の御姿が御母君の夢まくらにお立ちになった、など様々に尊まれる存在で、対して良秀は絵筆をとらせれば右に出るものはないが、人がらはいたって卑しく、気味悪がられる存在とされています。地獄変にもう一人重要な人物がいます。良秀の娘です。私は良秀の娘の不条理な人生を書きたいと思います。

良秀の娘は美人で大変器量も良く、さらに賢い人でした。良秀の娘の不運の始まりは大殿に声をかけられ、小女房として上げられたことでした。語り手は、娘の美しいのにお心をひかれて、というのほうそ、と言っていますが、これこそそうぞだろろうと思っっています。良秀の娘の不運の二つ目は良秀が地獄変の屏風を描くことになったことでしょう。良秀の娘はまさに大殿と良秀の軌轢にはさまれています。これほどに居心地が悪いこともないでしょう。

そして、三つ目。ある夜に誰かに迫られたこと。あの時に猿の良秀が――良秀の娘が可愛がったあの猿が――いなければ、事はもっと大きくなっていたかも知れません。良秀の娘に迫った誰か、とは大殿のことでしょう。

う。語り手はただのうわさと言っていますが、色好みの女好き、これが大殿の正しい姿でしょう。良秀の娘が頬を紅くし、乱れた服を着ていた、ということからもそれが分かるのではないのでしょうか。加えて大殿は自分の意のままにならないものを嫌う人がらと見えます。自分の思い通りにならない良秀の娘が何か罰を受けさせられても、仕方ないことだったのかもしれない。

良秀の娘が牛車とともに火にかけられたことが娘の最期の不運でしょう。良秀が地獄変を完成させるために大殿が準備した牛車、地獄を再現するために火を放つ牛車に良秀の驚きたるや、それは大きいものだったのでしょうか。同じくらいに良秀の娘の絶望も深かったに違いありません。自らが火に舐められていくのを、自分を可愛がってくれた良秀が見ているのですから、これほどに不条理なことはありません。もしこれが、自分に従わない良秀の娘に対する大殿の仕打ちなのだとしたら、自分に靡かなかった娘への腹いせだったとしたならば、これも不条理、いえ理不尽なことではないでしょう。そのおかげで良秀が地獄変を描き上げることが出来たというなら、もうある種の皮肉めいたものを感じます。

娘が火にかけられていた時、良秀は言いようのない輝きと恍惚とした表情を浮かべていました。絶望の中で見た地獄があまりにも美しかったからでしょう。自分が描きたいと思った地獄が目の前に表れたら、誰しもあのような顔になるのでしょうか。一つの芸術作品を完成させることが出来たとするなら、娘の不条理も少しは報われるのかもしれない。

「地獄変」を読んで、どうにもならないことは絶対にあると教えられました。責めたてられる時、自分には非もなければ、問題を解決する方法すらないという状況を想像して身震いしました。私はその絶望したくなる状況に娘のように耐えることはできないでしょう。袋小路に追いつめられた鼠は自ら命を絶つか、狩られるしかないのですから。しかし、私は人間です。鼠のようにただ狩られる訳にはいきません。終わるその時まで足掻き続けるでしょう。たとえ、大きな力にかられるとしても最後まで足掻くでしょう。本と違って現実は見えませんが、解決する方法はなくとも何か変わるかもしれません。足掻けば誰かの目には止まるでしょう。それでいいのだと思います。たとえ死んで、墓が苔蒸しても、誰かはきっと覚えていてくれるでしょうから。

ステイル・ライフ

池澤 夏樹 著

環境都市工学科 牛尾 幸帆

「ステイル・ライフ」を読んで

— 自分の中の世界について考える —

この物語は、「この世界がきみのために存在すると思つてはいけない。世界はきみを入れる容器ではない。」で始まる。その後「大事なのは、山脈や、人や、染色工場や、セミ時雨などからなる外の世界と、きみの中にある広い世界との間に連絡をつけること、一步の距離をおいて並び立つ二つの世界の呼応と調和をはかることだ。たとえば、星を見るとかして。」と書いてある。

私の世界、私の中の世界について考えてみると、小学生の頃は、「友達と遊ぶ」「先生の話を聞く」というような事を思つて過こしていたように思う。中学生になり、委員会などの経験から責任感や仲間とやりとげる事の喜び、将来への目標などについて考えるようになった。進学も、自分で考え目標に近づきたいという思いで、今の学校を選んだ。

私の世界は「少しずつだが確実に広がっている」と思っていた。

この話の主人公「ぼく」は、アルバイト先の染色工場で、宇宙の微粒子と水の原子核によるチェレンコフ光の話や、星の爆発、毎秒一兆地球に落ちる粒子の事などを話す佐々井という男に出会う。話を聞いているうちに、「ぼく」は自分が世界そのものの大きさにまで拡大され広大になった自分をはるか高いところから見下ろしていると考える。その時の「ぼく」は、佐々井をとて大きな存在に感じ、憧れのような感情を持ったのではないかと思う。

染色工場でも、応用化学を勉強し染色の専門家になるという目標を持つが、佐々

井に星や天使に例えられ、目標を失い、佐々井はもう、「ぼく」が探しているものを見つけ世界の全体を見ていると感じている。

私は、小さい頃に海面上昇で沈むツバルという国を知り「環境の仕事が出来たら」となんとなく考えていた。小学校六年生の時に、ツバルに何度も行っている先生と出会い、色々な話を聞かせてくれ、環境の仕事をする事を応援してくれた。いつかツバルに行こうと考え始めたのもその頃だった。先生がとても大きく見えた。私は、さらに佐々井の存在を大きく感じ、自分の小ささを痛感したのである。「ぼく」に少し共感した。

ある時「ぼく」は、佐々井に頼まれ株の運用を手伝う。そこでも、カナダに行った伯父から預かった五百坪で部屋が二十以上もある家で相当な額の現金を動かすという佐々井の大きさが見える。しかし実は、前の会社で横領をし、時効までの五年間アルバイトをしながら逃げまわり、時効の直前にこっそりと横領した金を全額返す為に株をやっていた。金を返した時「ぼく」が「これで自由の身かい?」「解放されたって感じる?」と聞き、佐々井は「いや、あまり感じない。」と答えている。

広い世界で自由に生きるように見えた佐々井が、本当は一番不自由で自分の世界の中だけで生きてきたのではないかと思う。今も気ままに宇宙や世界の中で生きているとは思えない。

でもそれを受け入れ、佐々井が自分の中の新しい世界をつくっていくのもまた宇宙や世界なのかもしれない。

私は、「ぼく」がこれからまた染色工場でアルバイトをする日常に戻り、自分の中の何かを見つけていくと思う。

人との出会いは、良い影響も悪い影響も与えると思う。「ぼく」と、私と先生との出会いの結末は違うが、私も小さな世界にいます。世界、環境、世の中、まだまだ何も分からない。家族や友達や先生、多くの人と出会い、影響を受け、学ばせてもらっている。

最初に書いた二つの文の意味が、いつか理解できる日がくるのか分からないが、今は自分自身の世界の中で、周りに目を向け精一杯生きて行くことと思う。

螢川

宮本輝 著

建築学科 石塚 仁奈

「螢川」を読んで

— 螢の「生」と身近な「死」 —

「風がやみ、再び静寂の戻った窪地の底に、螢の綾なす妖光が人間の形で立っていた。」これは、この物語最後の一文である。全く予想もしていない突然の出来事に、私は驚かされた。筆者は何故、この一文で物語を終わらせたのだろうか。

主人公である童夫は、貧乏に加え父の死、友人の死、その友人の父の気狂い、淡い思いを抱いている英子を残して意にそぐわない大阪行きの話。まだ十四歳であるにも関わらず厳しい冬から初夏にかけて様々な重苦しい出来事に直面する。さらに、父と母のそれぞれの過去、祖父である銀蔵の息子の死、その婚約者の妊娠中絶なども淡々と描かれている。

私は、十四歳という自分よりも年下である少年が、このような苦しい経験をして耐えられていることに驚いた。それと同時に、童夫は悲しみを乗り越えられる強い人間なのだと思った。

悲しみを乗り越えられる、と前に書いたが、この物語には「悲しい」というような童夫の感情は描かれていない。人物の思いや感情のはっきり描かれているところが一切ないのだ。少し描かれているとすれば、私の中で印象深いものが二つある。一つ目は、父の友人である大森という男に、お金と父の手形を代えてもら

いに行ったときのことである。大森は手形はいらないから、お金は童夫に貸すといい出したのだ。貸したお金は大人になったとき返してくれればいい、もし自分が死んでいたら返さなくていい、と。童夫は、「涙が溢れてきた。嬉しいのではなかった。といって悲しいでもなかった。」このとき童夫がどう思ったのかは、はっきりとは分からない。でも私は、童夫は嬉しい、悲しい気持ちより、やるせない気持ちで涙が溢れたのだと思う。お金のことは自分も、家族ももうどうすることもできない。大森は父でも母でもなく、自分にお金を貸すと言ってくれた。子供でどうしようもできない自分に背負わせてくれたのだ。私はこの場面を読んだとき自然と涙が溢れた。二つ目は、完全に寝たきりとなり、言葉を失い語れぬ父の見舞いに行ったときのことだ。童夫は大森に会いに行ったこと、銀蔵たちと螢の大群を見に行くことを告げる。すると父は、泣き笑いのままいつまでも同じ単語をくり返した。そして泣きだした父は童夫にしがみつき子供のように顔をこすりつけた。童夫は、「恐かった。…父から、一時も早く逃げていきたかった。」ここでもやはり、童夫がどう思っていたのがはっきりと描かれていない。私は、童夫は自分の父が弱り変わっていることを受け入れられず、こんな父は見たくない、こうも人は変わってしまったのかという思いだったのだと思う。

このように、この物語には人物の思いや感情をはっきりと描いていない。描かないことで私は、人物に共感するというより、その人になったように読み進めることができた。そして最後の一文に戻る。この文は、銀蔵、母、英子と四人で螢を見に行ったときの文である。目当ての螢は、四月に大雪が降ったときのみ見られる螢の大群だ。ここで情景描写はなんとも言えない。無数の螢が舞う美しさ。英子と童夫に降り注ぐ光の波しぶき。だが螢はただ華麗なおとぎ絵ではなく、もつと生々しくて命を必死でつなぐように、余裕なく懸命に舞っているのだ。私は最後のシーンに描かれるなんとも言えない情景描写をそのように感じた。これまで重苦しく描かれてきた「死」は、必死につながる螢の「生」と対比されているようにも感じた。最後の一文。それはきつと、螢であり人であり、命そのものを表しているのではないだろうか。私はこの物語から今まで考えたことのない「生」と「死」について、深く考えることができた。

やぶ

山本周五郎 著

建築学科 井上 咲

「やぶ」を読んで

— 周囲の人のありがたさ —

「タイトル、『さぶ』より『栄二』の方がよかったんじゃないだろうか。」
物語の中盤、栄二を中心に進んでいく物語を読みながら、私はそう思った。

経師屋に住み込みで働く職人、さぶと栄二が主な登場人物である。物語は二人がお得意先の綿文に仕事に出かけたところから急展開する。栄二が盗みを働いたという無実の罪に問われ、寄場に送りこまれるのだ。

栄二は最初、寄場を出たら必ず復讐をしようと言っていた。そう言ったときの栄二は、賢くて優しくもとの彼とは違っていた。物語を読んでいて怖いなど感じた場面がいくつかあったのだが、私が一番怖かったのは、栄二の中にある復讐してやろうという気持ちだった。もとは頭が良く優しい青年だったのに、ケンカっ早くて人を寄せつけない男になってしまう。栄二の人の変わりように驚いたとともに、もし自分のまわりの人がこんな風に変わってしまうことがあったらと想像すると、とても怖くなった。

しかし、そんな栄二も結果的には、罪をさせた犯人がわかっても復讐をするとはなかった。それどころか、彼は寄場で生きたことはためになったと、人生を狂わされたことを前向きにとらえるのだ。人間一度きりの人生を他人に狂わされて、許すことができるだろうか。普通、その答えは否だと思う。けれども栄二がそんな風に思うことができたのは、寄場にいる彼を気にとめてくれる存在があった、寄場で得た経験を生かせる場所が用意されていたからだろう。もしも寄場を

出て、誰も受け入れてくれる人がいなかったとすれば、寄場で過ごした期間は、彼にとってただの人生の無駄にすぎなかったと思う。そして、一番大きかったのは、やはりさぶの存在だと私は考える。彼は自分のことをおいてでも栄二のことを心配し、栄二に尽くした。仮に私が何か無実の罪に問われたとして自分の家族や友人はそんなにも尽力してくれるだろうか。私ならできないと思う。同情したり、無罪を証明しようとするとはできるかもしれない。しかし、さぶのように友人を罪から守ることができなかったと自分を責めるほど、他人を思うことはできない気がする。さぶの栄二を思う心のまっすぐさに感心した。

「…能ある一人の人間がその能を生かすためには能のない幾十人という人間が、眼に見えない力を貸していることを考えてほしい。」これは与平の言葉であるが、この言葉にはとてもドキッとさせられた。自分が能ある人間かどうか、そういうことではなく、自分が何かをする時には必ず誰かのおかげでできているのだということを忘れてはいけないと思った。

私の中で最も印象に残っているのは、「人間のすることにはいちいちわけがなくつちやならないってことはないんじゃないか、…」というさぶの言葉だ。それまでずっと、さぶが栄二に尽くす理由を探していた私だったが、この一言を読んで納得がいった。私も家族や友人が元気がないと励まされなくなる。そして、励まされなくなることに特に理由はないのだ。することに對して理由はなくてもいいというのは当たり前のことなのかもしれない。しかし、今回改めてそれに気づかされ、確かにそうだとともに納得させられた。

私は最初に『栄二』の方が良いと思うと書いた。しかし物語を読み終えて、やはりこの本は『さぶ』でなくてはならないと思う。栄二の人生が物語のような展開になったのは、さぶがいたからこそなのだ。栄二だけが頼りなんだと言っていたさぶだが、本当は栄二の方がさぶに支えられていたのだと私は思う。自分のことを気にかけてくれる人がいるということは本当に幸せなことだと改めて感じた。

2年生の部

海と毒薬

遠藤 周作 著

電気情報工学科 田北 人士

「海と毒薬」を読んで

— 時代の経過と思考の変化 —

この物語は、戦時中に米軍捕虜の生体解剖事件、それを行った医者や看護婦の心境などを描いたものである。主な登場人物である勝呂医師の他に、同僚の戸田医師達複数の人間の考え方が物語や手記の形で書いてあった。

自分の考え方はどの人物にも当てはまらない物だったし、友人達に聞いても登場人物達と同じような考え方をする人は少ないと思う。それは時代の流れによって変わってしまった考え方だと言える。同じ物事だったとしても今と昔ではそもそも考え方が違うのだから。ましてや戦争末期だ、医師たちの言う通り空襲によって人の死が日常的なものとなっているからこそ、人々にとっての命というものが軽くなってしまっているのだ。医学の発展の為と言われれば、その恩恵を受けている我々には何も言えない。かといってそんなことを肯定していいものなのだろうか。読んでいる最中にずっと考えていたことだ。

逆に本の人物の思考に合わせて考えてみる。実験に肯定的だった戸田医師は、これも時代だからと、医学の進歩だと分りきっていた。確かにそうかもしれない。先程述べた通り、医学の発展に貢献していることは事実だし、命が軽いその時だからこそその考えだ。でも、人の命が軽い時代だからといって生体解剖なんてやっていいのか。そう考える人物もいたのだ。勝呂医師の

考え方こそが、自分がその場に居た時にするであろう考え方に最も近かった。彼は実験に参加するのを承諾してしまう。しかし、実験に直接は手出しをしなかった。ギリギリのところでは迷っていたからなのだろう。彼のこの行動に関して、様々な意見があるのだろう。迷うくらいなら最初から断ればいいのか、参加を承諾するくらいなら迷うなとか。自分が感じたこの本の伝えたいことはこれなんじゃないかと思った。時代による考え方の変化は確かにあるけれど、勝呂医師は最後に踏みとどまっていた。これが現在と過去の考え方を繋ぐ物だと自分は考えた。そういう時代だからしかたがないと言う同僚の言葉に最後だけでも抗っていた勝呂医師。自分も参加の誘いを断ることはできなかったと思う。けれど、必ず実験には参加しないだろうと断言できる。実験が行われてから時間がたち、改めて患者に実験に参加したという事実を突きつけられた時に、彼は同じような場面になっても自分は断れないと言った。断り切ることができないと。それが彼の弱さなのだと理解すると同時に、共感することのできた自分の弱さだと思った。一つ違うのは、自分の言う実験に手を借さないというのはどこまでいっても現代の考え方だということだ。勝呂医師の様に、その時代の人間が踏み留まるのとはわけが違う。彼の方が自分なんかよりも何倍もすごいのだ。

人々にとっての当たり前の思考。それは時代の流れによって変わるものであると最初に書いた。しかし、それが全てではないということがこの本を通してよくわかった。当たり前が全てではなく、自分が今まで培ってきた価値観や経験を照らし合わせることで当たり前に疑問を持つことを学んだ。時代の流れに関して大きな違いがこれからなくとも、自分が学んだりしてきたことで自らの意見を形づくる。これが、自分にとっての一つの課題なのだと思う。

雪国

川端 康成 著

環境都市工学科 大室 ひな

「雪国」を読んで

— 日本文学の美しさとは —

私がこの本を取り上げた理由は、日本文学を代表する名作といわれるものを、日本人として一度は読むべきだという単純なものである。というのも、先日、洋書の翻訳されたものを読んでいて、作中でイギリス人女性の登場人物が、川端康成の「雪国」を読めば日本文化や文学の美しさがよくわかるなどと話す場面があったのだ。そこで、今回はこの小説の美しさはどこにあるのか探してゆきたいと思う。

まず、最初に私が抱いた疑問は、この作品のストーリーははたして美しいというものかということである。主人公の島村は妻子を持ちながらも遠い雪国に住む芸者、駒子と毎年冬を共に過ごすのである。島村の行為は妻に対しては不誠実といえるものである。また、話の中にはあいまいではっきりしないことも多くある。例えば、島村という人物は、妻子を置いて長期間温泉地に滞在したり、その職業も西洋舞踊の本などを趣味程度に翻訳したりと、その実態がよくつかめないのである。他にも、葉子という女性が重要な人物なのだが、島村と駒子と彼女の関係も謎のまま最後は運命にほんろうされて死をとげてしまうのである。

ここで、私はこれらとは非常に対称的な要をいくつか見つけたのである。

まず、二人の女性の純愛である。駒子は、非常に健気な、女の子らしい性格で、ただひたすらに島村のことを好く。よく、島村に、帰れと言ったり、やっぱり帰るなど言ったりと、とてもかわいらしい女性である。また、一方葉子も、病気で亡くなってしまう一人の男性のことを、ずっと看病し、亡くなってしまった後も毎に墓参りをする。本当に一途なのである。彼女は、看護婦になりたいと昔思っていたと島村に打ち明けるが、もう看護婦にはならないと言う。その理由を尋ねると、「だって、私は一人の人しか看病しないんです。」ということだった。たった一人の男性をここまで愛し抜く激しさに私は驚かされた。

この二人のはっきりとした真っすぐな恋が、島村のあいまいさによって、よりひきたつように私は感じた。その他にも、作中に多用されているいくつかのキー

ワードがある。駒子には、“清潔”という言葉が実にたくさん使われている。どんな状況にあっても、彼女の印象は非常に清潔なものなのである。葉子には、“澄み通った声”の持ち主であるという説明がしばしばみられる。これらの言葉が作中に何度も出てくることで、作品全体にクリアで美しさを感じると私は感じた。

最後に、私の疑問を解くかぎになると思われるキーワードがある。それは、“素直”だ。駒子が、島村に、「ねえ、あんた素直な人ね。」と言い、島村も自分のことを、“そうだ、自分ほど素直な人間はいないのだ”と思う場面がある。私は、なるほどな、と思った。この作品の中の登場人物はみな素直で、自分の気持ちに正直なのだ。だから、あいまいだと思ったストーリーも、非常に自然に、そして美しささえ感じられると思ったのである。

この作品を読んで、日本ならではの恋の世界観に触れることができよかったです。

天平の躉

井上 靖 著

建築学科 難波 宗功

「天平の躉」を読んで

— 信念を貫いた一人の僧侶 —

二十年という長い年月にわたる僧侶の労苦が、私の心をしっかりと捉えた。自分の故郷でない他の国に、どうして、そこまで仏法を伝えようとしたのだろうか。「自分」のため、「周りの人」のために何かをしようとは、当たり前のように私は思う。しかし、何度も失敗すれば、容易にあきらめてしまうかもしれない。

私がもし、鑑真であったなら、五度失敗しても、盲目になっても、あきらめない自信がない。日本が鑑真にとっての「故郷」なら、何度失敗しても帰りたいと思うのは当然である。しかし、日本は鑑真に何のつながりもない。ただ、日本の留学僧に頼まれただけのこと。

五度渡航に失敗、そして失明したにもかかわらず、あきらめなかった彼の心の奥には何があったのだろうか。

そこには、全て縁によって成り立っているという仏教の教えが深く根ざしているのではないか。高僧と尊敬された鑑真だからこそ持っているものである。もしも彼が、仏の道を修業し始めてから少しの年月しか経ていない者だったなら、その教えは学んでいても、深く根ざしておらず、渡日を失敗した時点であきらめてしまうかもしれない。長い年月を経て、色々なことを体験した鑑真だからこそ、何度も失敗してもあきらめなかったのだろう。

「夢」に関して、私達高校生や中学生は、よく「決してあきらめない」等と書く。しかし、いざとなったらどうだろう。人生体験が豊富でない私達高校生や中学生は、どんな失敗があろうと、どんなに文句を言われようとあきらめずにいられるだろうか。口で言うのは容易だ。しかし、実際にそういう時が来ないと、その苦しみは分からない。だが、「決してあきらめない」という意志は強く持った方がよい。強く持った方がよいと、人生体験のない私が言うのも変な話であるが、人生体験が豊かであるほど意志を強く持てるのだと思う。

鑑真が来日したときには、すでに盲目であったが、その時の心情はいかなるものであったのだろうか。五度

の渡航失敗に、唐の役人の妨害、重なる災難の末に成功した彼の心情は、計り知れないものがあったのではないか。

試練に耐えた鑑真の度量の大きさは計り知れない。日本の為に、仏法を伝えるために、命懸けで、どんなことが起ころうと信念を貫いた。

何かの目標を持ち、それを目指す私達にとって、信念を貫いた鑑真は手本であると思う。又、どんなことが起ころうと、それを中断すれば、最初からそれに向かって何もしなかったのと同じことだと思う。だからこそ、信念を貫くのは、私達にとって大事なのだ。

将来どんなことが起こるか分からない。それに負けず、信念を貫き通す姿勢また強い意志を持ちたい。又、体験したことを学びとして生かし、よりその意志を強くしていきたい。

あせらず、挫折せず、成長していく。私は、決めた。

鉄道員

浅田 次郎 著

建築学科 前本 将志

「鉄道員」を読んで

— 全て捧げてこそなれるもの —

乙松は死んだ妻と娘のために一人、駅のホームに立ち続けたのだと思う。

乙松が四十五年間立ち続けてきた幌舞駅は一日に三度だけ一両だけの気動車がやって来る。乗客はほとんどいない。それでもホームに立ち、一人気動車の誘導をするのだ。そんな中乙松も定年の齢となり、唯一の幌舞行きも廃線が決まった

四十五年間ポッポヤとして生きてきた乙松は何が起こっても決して泣くことはなかった。遅くしてやっと産まれた娘の雪子がまだ2才の時、乙松は妻と雪子をホームから送り出し、雪子が冷たくなって帰って来ても、ホームに立ち旗を振りながら迎えた。涙は流さなかった。妻が危篤という報せを受けても、ポッポヤとしての仕事を終えるまで、病院には向かわなかった。

妻と雪子を亡くし、幌舞駅も活気が無くなった中で、何故一人ホームに立ち続けられたのだろうか。もし僕なら辛すぎて他の仕事や生き方を探しそちらに逃げてしまうと思う。乙松の言う「ポッポヤ」はそこまで家族や自分自身を抑えつけなければいけないのだろうか。しかしそれは単純に、ポッポヤに誇りがあり、愛しているからなのだと思う。集団就職のために多くの若者が都会に出て行ってしまったが、それでもその人たちを送り出せるのは乙松自身しかいない。だから一年中ホームに立つのだと思う。一日に三度だけ気動車の誘導をするのがポッポヤと言われると楽な気がするが、実は雪が吹ぶく中でも乗客がいなくても都会へと出ていった人たちの郷、誰かが帰ってくるかもしれない場所である幌舞駅を守っていくのが本物のポッポヤなどと思った。だから雪子が冷たくなって帰って来た時も、ポッポヤとして迎えたのだと思う。だから半端な気持ちでポッポヤはしないんだと涙をこらえたのだと思う。その気持ちが家族がいなくなって辛い時の乙松をホームに立たせたのだろう。

僕は乙松みたいに一つの大きな信念を持って生きていきたいと感じた。乙松は死んでしまう前日に夢の中で成長した雪子と再会し、ポッポヤだからと家族に対して上手に接せなかったことを謝ると雪子は気にしていないと優しく許していた。それは、雪子が産まれて、死んでしまった後もずっとポッポヤとしてホームに立ち続けたからだと思う。全てを抑えこんで一生懸命やってきたことだから、雪子や、鉄道員達に愛されたのだ。僕は建築家になるという夢に向けて頑張っている。もしも建築家になれたのなら、全力で励みたいと思う。そうやっているうちに立派な建築家として周りから親しまれ、全力でやってきて良かったと思えるようにしたい。この『鉄道員』を通して、泣きたいくらい辛いことがあったとしてもそれまでやってきた事から逃げずにその後も全てささげていくうちに幸せと思えることが待っているんだなと思った。

富士山頂

新田 次郎 著

建築学科 松本 華澄

「富士山頂」を読んで

— 挑戦する勇氣、成し遂げる力 —

なぜこの本を選んだかという、私は以前富士山に登ったことがあり、この本のタイトルを見た時に興味を引かれたからだ。日本人にとって偉大な存在である富士山についてどのようなことが書かれているのか、また自分自身が感じた富士山と比較しながら読みたいと思った。

この本には、標高三七七四メートルの富士山頂にレーダーを取り付けることに情熱を燃やす、三菱電気技術部員の梅原と、気象庁測器課長である葛木を中心とした男たちの姿が描かれている。

私は、この小説の中の細かな描写が印象に残った。作者の新田次郎は富士山測候所に勤務してから五年間にわたり通算四〇〇日を富士山頂で過ごしていたそう。つまり、富士山頂を自分の体をもってして体験しているのである。このような体験を作者自身がしているからこそこんな文章が書けるのだ、と思った。

私はこの本を読んで、主に二つの事について思ったことがある。一つ目は、「この男たちの熱き挑戦はなんて素晴らしいのだろう」ということだ。富士山は過酷な自然環境で、天気はいつも不安定。また空気が薄いので、高山病に悩まされ、頭が割れるように痛んだり吐き気がして食欲もなくなったりする。実際に私が富士山に登った時も、まともに食事はできず、普段の生活行為ですらとても辛く感じた。そんな環境の中、夏の2ヶ月という限られた作業期間でレーダーを富士山頂に設置しようとする男の姿は、とても勇ましく思えた。二つ目は、「なぜそこまで富士山頂に気象レーダーを取り付けることに専念できたのか」ということだ。一つのことに向かいひたすら努力する事は普段私たちが生活している中でも難しいことだ。また、ある障害にぶつかった時、どうすればいいのか分からず先を見失ってしまった時も決して諦めないという心はとても重要なことだと感じられた。したがって、そのような男たちの姿はこの本を読んでいく中で非常に感動させられる部分だった。

私はこの本を読んで、どんな環境の中でも、自分が掲げた目標や夢に向かってひたすら努力する大切さというものを教えられた気がする。「富士山頂」というこの話はまさに大自然と人間との戦いの物語であった。台風から自分たちを守る為に、知力・体力・時の運、そしてやり遂げようとする意志で気象レーダーをどうにか取り付けようと努力していた。このように一つのことに必死に向かう姿が、私に「頑張ろう」という気持ちを持たせてくれた。

今まで私は、何か失敗するとその理由を周りや環境のせいにして、本当の原因から逃げてしまうところがあった。しかしこれからはきちんと自分と向き合い、今ある夢や目標を実現させるための努力を最大限にしていきたいと思う。例え泥まみれになっても、何回失敗を重ねても、その都度成長していきたい。また、まだ踏み出したことのない場所に足を踏み入れ、自分が興味を持ったことには積極的に参加していきたい。この本は、そんな一つのことを成し遂げる力や、色んなことに挑戦していく勇氣を与えてくれるような話だった。

3年生の部

日本を捨てた男たち

水谷 竹秀 著

機械工学科 三浦 純

「日本を捨てた男たち」を読んで

この本を読んで、日本という国について考えさせられた。豊かな故郷を捨て、フィリピンに渡りいわゆる「困窮邦人」、外国から来てホームレスになった人々の実態が描かれていた。困窮邦人になった人々は皆、「何か」を求めてフィリピンに渡っていた。

日本は今、個人に多少の差はあれど、多くの人が世界的にみても衣食住の揃った裕福な生活をしていることができる。私もその中で学校に行ったり友達と遊んだりして毎日を生きている。未だ紛争などのある世界の中で、このような平和な生活を享受しているということは、とても幸運なことであると私は思っていた。そして、フィリピンに渡り困窮邦人になった人々にも、この生活はあった。それなのに何故、日本を出て、決して裕福であるとはいえないフィリピンに、家族も友人も職も放り出して向かう人々がいるのはどういうことなのだろうか。

吉田正孝（仮名）という男性は、フィリピンクラブで出会った女性を追いかけてフィリピンへ渡ったそうだ。職もあり家もあったが、家族や友人との関係は寂しいものだった。そんな中で出会ったフィリピン人女性の、自分に向けられた笑顔に男としての自尊心をくすぐられ、四十八歳という年齢でフィリピンに向かったのだ。そこまでの強い感情を抱くものなのかということが、私には分からなかった。フィリピンに着いてしばらくは、女性や女性の家族とも仲良くやっていたが、やがて持っていったお金も少なくなり、遂には帰りの飛行機分のお金も女性に貸してしまう。そこから関係は悪化していき、そして家を追い出され、男性は

困窮邦人になってしまった。異国の地で裏切られ、困窮邦人になるなんて、私の想像を絶するものだろうと思った。そして、日本人は金を持っている、程度にしか思われていなかったのかということが、私は悲しかった。

しかし、フィリピンの人々には、温かい人も多かった。「困っている人は助けるもの。」という考えが、フィリピン人の多くの人に根付いているようだ。それはホームレスに対しても変わりはない。フィリピンには困窮邦人が沢山いるが、その理由の一つが、この考えが根付いていることだった。日本では、ホームレスと話すことはおろか、近づくことにすら抵抗を持っている人の方が多いだろう。私も、その内の一人である。思いやりの心を持つことは大切だと改めて思い知らされた。

困窮邦人への対処については、フィリピンでも大きな問題になっている。日本に帰してあげることができれば一番なのだが、金銭面の問題を解決するためにフィリピン政府が税金を使うことは難しい。となれば、家族や親戚の送金を頼りにするしかないのだが、それらを放り出してフィリピンに行った者に、わざわざお金をを出してくれる人もそうそういないというのが現実である。私だって、そう簡単には送らないと思う。「自己責任だろう。」ということ、本を読みながらも考えていた。

しかし、「このような考えが、人々をフィリピンに向かわせたのではないか？」とも考えた。フィリピンの人達に比べれば、家族愛や親戚同士の絆、地域社会のつながりが、昨今の日本では希薄になっているのではないだろうか。これこそが、平和な日本での問題なのではないか。フィリピンに向かった人達が「幸せ」を求めて向かったのであれば、必ずしも裕福であるということが幸せであるということではないのではないかと、この本を読んで深く考えさせられた。

社会の真実の見付け方

堤未果 著

電気情報工学科 由良 和大

「社会の真実の見付け方」を読んで

私がこの本を読んで感じたことは、私達はメディアや政府、友達や家族その他大勢が発信している情報に知らない間にコントロールされてしまっている可能性があるということだ。

「アメリカ同時多発テロ」この文字を見ると直ぐに航空機がタワーに衝突する映像が思い浮かぶ。当時アメリカの高校生だったレイモンドはこの事件がきっかけで軍に入隊した。端的に他人へ伝えるならこうなるだろう。テロリストのテロ行為によってレイモンドは軍に入隊したと。しかしこの情報は九割足りていない。当時高校生だった彼に入隊という選択肢を選ばせた重要なファクターは他にある。本文にはこうある。「相手は理屈など通じない悪魔だ、やられる前にこちらから攻撃するしかない」

大統領がテレビの中からそう言って団結を呼びかける。

アメリカに新しい「掟」が生まれた瞬間だった。

たちまち街じゅうに星条旗がかかげられ、国歌が流れ、この戦いに勝利することがそれ以外のあらゆるものにとってかわった。邪悪な敵が銃口をこちらに向けているときに、教育や医療、病人や障害者や女性やゲイやホームレスの権利にかまけている暇がどこにある？」

これを見るとまるでアメリカ国民全てがテロリストとの戦いを望んでいるようである。当時高校生だった彼もそう感じただろう。先程から「当時高校生だった」を多用しているが彼は当時高校生だったのだ。今まで生きてきた中で一番大きな人の流れ、情報量、生の熱量だったに違いない。抗うのは難しい。これらが彼を入隊へと導いた九割の要因であると感じた。

レイモンドは八年後のインタビューにこう答えている

「いま振り返ると、八年前に守ろうとしたものさえ正直言ってもわからない」

ぞっとするような言葉だ。よく分からないまま他人の流す情報に動かされて戦場に行き人を殺していたということだ。そこには自分の意志や考えがあるようで、実は誰かが発信して巨大になった波に飲み込まれただけだったと。

ぞっとしたのは、私も波に飲み込まれてしまうと感じたからだ。なぜなら、アメリカ国民がやったことは私を含めたアメリカ側の人間から見ると間違っているとは思えない、アメリカ側の情報しか見ていないから。日本でも直ぐに頭に浮かぶほど何度も放送された、あの映像を見てアメリカが悪いと言う人はいないであろう。そう、私たちは与えられた情報の中でしか善と悪を判断できない。例え間違った情報であっても、人の流れさえできてしまえば疑うことはできなくなる。そして、その情報で得た善と悪の盲目的な判断によって人殺しさえもしてしまう可能性があるのだ。

日本は今、戦争が出来ない国だが他国に攻撃され何万人も殺されたときに止まることができるのだろうか。私はそのときに発信される情報、テレビだけではないネットの動画、ブログ、Twitter への書き込み、全て重要になってくると思う。今の時代は一般人でさえ強力な情報の発信源であるということを知っておかなければいけない。自分が感じたことを不用意に吟味もせず発信してしまえば、それらは間違いなく大きな波となって、その情報を見た人を動かしていくだろう。人は情報によってコントロールされるのだから。日本には、九条がある。一つのムーブメントを起こしうる象徴の一つだ。情報にコントロール、支配された人達を元に戻すことは難しいだろう。その情報が説得力をもった真実ならなおさらだ。波を打ち消すには波しかない。

だが、その情報が正当性を持っていて、国民の大多数が情報に気付かぬうちにコントロールされてしまえば、その流れを止めるのは到底不可能なのかもしれない。

世界の国 1位と最下位

——国際情勢の基礎を知ろう

眞 淳平 著

環境都市工学科 三浦 佑輝

「世界の国 1位と最下位

——国際情勢の基礎を知ろう」を読んで

— 日本は本当に豊かな国といえるだろうか —

もしも、「今の悩みは何ですか。」と聞かれたとしたら、「進路をどうしようかと悩んでいる。」と答えるだろうか。しかし、世界に目を向けてみると、現在も、国民の大半が貧困に苦しんでいる国が三八か国もあるというのが現状だ。例えばコンゴ民主共和国では国民の三人にひとりが「文字を読む」という行為ができないでいる。日常生活の多くの時間を生きていくために必要な水を運ぶために費やさざるを得ないからだ。

やはり、今私は幸せである。豊かな日本に生まれ、多少の不満を抱えながらも、不自由無く暮らしている。将来にそれほど大きな危機感など無いと考えている。確かに、集团的自衛権、TPP、デング熱、中東の社会不安、地震や土砂災害、中国や韓国との領土問題など、毎日報道されるニュースには不安な事が多い。しかし、日常生活の中ですぐに危機感を持つことは無い、と考えていたのだ。

しかし、それは間違っていたと気付かされた。繰り返し耳にしていた「少子高齢化」という言葉。実は、日本は、世界一の高齢者大国なのだ。人類がこれまで一度も経験をしたことのない超々高齢化社会を世界に先駆けてこれから体験していくことになるのだ。近い将来、国民の三人にひとりが高齢者という人口構成になるのだ。事実、私の家族構成を考えてみると、両親には、それぞれ兄と姉がいるが、ふたりとも独身である。私の祖父母は、四人共健在だ。しかし、私はひとりっ子なので、同居はしていないが、十代の私がひとりで、八人の大人を支えているという構成になり得るのだ。このまま若年層が増えていかなければ、将来、働き手が不足するのは必至だ。労働力が減少するのに、高齢者が増えて、社会福祉は増加していく一方であれば、経済も破綻してしまうだろう。少しくらいの増税では、間に合わなくなるのも当然だろう。

更に、日本という国は、先進国一の累積債務を抱えているのが現状だ。数年前、政府が破産してしまう危険性があると、世界を驚かせたギリシャ以上の債務を抱えているのだ。

日本はこのままで大丈夫なのだろうか。すでに人口のピークが過ぎて、今後は少しずつ人口が減っていき、高齢者の割合が増えていく、という社会になってしまうのだ。

現在、将来発展していくだろうといわれているのは、「BRICs」とか「ネクスト・イレブン」と呼ばれている国々で、これらは、どの国も、人口や資源だけでなく、そのほかの産業基盤など、さまざまな要素がそろっている。もともと資源がない日本が、このまま人口が減少していったとしたら、ますます、弱体化してしまうだろう。かつて、「小さな島国」にもかかわらず、経済的な繁栄を勝ち取った「奇跡」のような国とまでいわれた日本。いつまでも、豊かな経済力を維持し続け、今後も発展し続けていける国であってほしいのはいうまでもないことだ。

私の住むこの国が将来に渡って、不安なく繁栄していくためには、やはり、少子高齢化は、何としても、改善していかなければならない問題であると考えさせられた。今の日本は決して豊かな国ではないということ認識した上で、今後、私たちはどうすべきなのか広く世界を見渡して、さまざまな考え方を開き、ひとりひとりが行動をしていくことが、求められていると痛感した。

透明な建築

二川 幸夫 著

建築学科 茂木 友寛

「透明な建築」

一 妹島和世・西沢立衛読本 2013 一

透明な建築空間に入った時、私は新しい時空を感じた。

SANAAと聞けば建築を知らない人でも聞いたことがある。日本を代表する建築ユニット。なぜこの二人の建築は私を含めたたくさんの人々を新しい時空空間へと誘い、感動させるのだろうか。

日本人建築家の妹島和世と西沢立衛が建築空間をつくる時の思想やベクトルを細かに記した本。

作中は二人の建築家が近年設計した作品がどのように生み出されたのかを多くのインタビューを行い紡ぎ出させている。「特殊建築家」と世間から呼ばれる二人は「普遍性」と「特殊性」の両極端な言葉を持ち出し「思想としては普遍性を目指しているけれど、建築物単位としては、複製再現出来るもの、誰でも出来るものなどに興味がない」と日本人の弱いとされる独自性が必要と語りながらも、「バランスがなければあまり、意味がない」と調和がなければ建築は形にならないと実際のイメージから現実へのアクセス方法が書かれていた。このセンスは今後私にも必要になるスキルだと思う。

僕はSANAAが設計した「海の駅直島」香川県直島にこの本を読んだ後見に行った。日本の多くの建築は摩天楼のように立ち上がり、家々は塀で囲まれ、プライバシーの固まりが小道に迫っているように僕は今の建築を感じている。町を歩いていていい気分にはなれないところがある日本の町並み。

しかし、この海の駅はフェリーの港施設や観光案内所、バスターミナルなどの複合施設がとけ込み合い一つの空間として建ち利用する人々も普段より明るく感じる空間だった。

私が建築の道を進もうと思った大きな出来事がある。デンマークのコペンハーゲンを訪れたとき。コペンハーゲンの町並みは古い石造りの建物の中に王立図書館、スカンジナビアホテルなどの開放感があり、透き通った新建築が融合していた。パブリックとプライバシーが見事な調和をしていた。私はこの町を見て日本でもこのような町並みで人々の新しい交流が生まれる建物を作りたいと思い建築に興味をわいた。

作中でSANAAが町を変化させて地域のラウンドスケープとなった「豊島美術館」が紹介されていた。この美術館は地域をたった一つの建築で変化を生みだせれると信じる僕にとって刺激となった。かつて豊島美術館のある豊島は高齢化が進み、学校も児童数が少なくなり閉鎖された、瀬戸内海に浮かぶ小さな島だった。「構造でしかないような建物をつくっておきながら、人はあんまり構造を感じないと思います。」内か外か分からない豊島美術館が生まれたことで豊島には観光客が増加し多くの人が豊島の自然に惚れ込み、移住者も現れ学校も再開し島がにぎやかになった。西沢さんの話を読んでいくうちに自分でも地域を動かせる建物を作りたいとさらに思うことが出来た。

建築の本を読むことで建築空間は言葉に表すことが可能で、私にとっては刺激的な建築との接し方になった。建築家が想像して作り上げた空間の捉え方を文章で感じ、実際に見たことで、より特殊建築家SANAAを少しであるがメッセージを受け取ることができたと思う。

今後僕が建築をつくる時がくれば、この夏深く読み進めたこの本の言葉とセンスが助けになってくれるだろう。

4年生以上の部

百億の昼と千億の夜

光瀬龍 著

環境都市工学科 吉本 海

「百億の昼と千億の夜」を読んで

三原市の北西部、ぐねぐねとした山道を登っていった先に佛通寺というお寺がある。禅宗の一派、臨済宗系のお寺だ。この夏僕はそこへ納涼ついでに行き、獅子や象に乗った文殊菩薩像、普賢菩薩像などを見て回った。仏教に関して殆ど無知な僕は、ただただ歩くだけではつまらないので、佛通寺の奥にある昇雲の滝にも足を運んでみることにした。道中は連日の雨で足場が泥濘んでいる上、山の独特な湿気で体中が矢鱈汗ばむ。昇雲の滝に到着した頃にはシャツが重くなっていたが、それでも轟々と流れ落ちる水を、壮大な滝を見ることができた。然し、僕の心に残ったのはその側にひっそりと佇む、成長する樹に食べられた山火事注意の金属看板だった。

さて、この本はおおまかに言えば『世界破滅の因を探求し冒険した偉人たちの物語』である。序章を除く最初の四章は、それぞれに違う時代を生きた偉人、若しくはその目撃者の目から、滅亡因子による衰亡の予兆が描かれている。それは例えば広大な平原の、遠く靄の向こうをゆく巨大な山脈であり、それは例えば仏教における六欲天の、虚数空間に走るひずみや四億年にも及ぶ梵天王と阿修羅王の破滅へ至る争いなどである。そして、そうした世界から時は数えるすべもなく流れ、シッタータ、あしゅらおう、おりおなえの三人が荒廃した未来に集まった時、彼らの物語は一つになって動き出す。彼らはかの偉人たちの記憶や人格を緻密にインプットされた人型機械であり、銀河系とアンドロメダ星雲の衝突を意図した何者かを追って、惑星を越え、時空間を越え、敵との戦闘を経ながら進んでいく。終末に向かう多くの世界を垣間見ながら、外宇宙に存在する滅亡と創成の無限の繰り返しを目の当たりにするのである。

とにかく時空間的に壮大なだけでなく、匂い立つような時代の描写や次々と書き出される目の眩むような光と色の奔流に圧倒される。まるで、自分の胸の中心に内燃機関が埋め込まれているように錯覚させられるのである。然し、そのまた中心には仏教で云う『空』、つまり量子力学の『ディラックの海』と凡そ等しい空間がぽっかりと創られてしまっているのだ。空即是色、つまり万物を包含する無でもある、その虚無的空間が。

物語の最後、仲間を虚数空間に喪ったあしゅらおうが、世界の傍観者であり続けた転輪王と会話する部分がある。そこに、転輪王があしゅらおうに世界の果を問う場面がある。あしゅらおうは『宇宙の膨張が光速に達した限界であり、宇宙全体の質量で空間は閉ざされ一個の球の内部を構成する』と答えるのだが、転輪王は『閉ざされた内部は無限の外の広がりの一部を構成しているに過ぎない』と言い、『時もまた、無限の外と広がり構成する超時間の一片にすぎない』と諭す一幕がある。

これは認識を絶する無常観だ。そして同時に、仏教の刹那滅にも通じるところがある。万物は生じると共に滅し、またそれを因とし生ずる。極限を取っていくと空となり、積分すればあたかも存在しているように見えるというものだ。それは僕に、途方も無い歳月をかけて金属看板をその一部とした、あの樹のことを思い出させた。

刹那を生きる僕達にとって、永遠という概念は恐ろしく、また尊いものだ。あしゅらおうは最後、自我にブラフマンを見てはげしい喪失感に襲われる。還る道もなくなつた一人、幾千億の昼夜が寂寞と前方に広がっているのだ。寂しくないわけがない、と思う。ただ僕は、その無常に喜びを感じてもいいのではないかも、また思う。なぜなら、これから社会に出ていく僕の未来を靄のように覆う不安は、可能性の広がり裏返しであり。その転回の連続を『生』への歓びに変えることもまた、人生の楽しみ方だと信じているからだ。

のぼうの城

和田 竜 著

専攻科 機械電気工学 都田 智大

「のぼうの城」

『忍城水責石田失策の事』——豊臣秀吉による小田原征伐の様子を記した史料に、必ずといっていいほど登場するこの話は、何度も歴史ものの小説の題材として取り上げられているが、中でも最も有名なのは、野村萬斎氏が主演を務めた、和田竜氏が書いた『のぼうの城』であろう。しかし、舞台となった忍城は武蔵国北部(現在の埼玉県北部)に位置する、本城の小田原城から遠く離れた、後北条氏家臣の成田氏が支配する支城の一つにすぎなかった。ではなぜ、この城が現代において注目されるようになったのか。

そもそも、この忍城は沼地に点在する島に橋を渡す形で築かれた城であり、攻めにくく守りやすい城であったとされている。過去にも北条氏政や上杉謙信などに攻められたことがあったが、いずれもこれを退けている。

そして時は一五九〇年(天正十八年)、惣無事令違反を名目に後北条氏征伐を決行、石田三成に館林城及び忍城を攻めるよう命令した。しかし、三成が二万三千もの兵を率いて忍城を攻めたが、守る城側は小田原城に北条方として参陣した城主・成田氏長に代わり、従兄弟の長親を城代とし、家臣と農民ら合わせて三千人でこれに対抗、ついに忍城は落城せず、先に小田原城が落城したことによる開城となった。このようにして、忍城は元々攻めにくい城ではあったが、小田原征伐の際、最後まで落城しなかった城として、現代まで語り継がれることとなったのである。

この忍城攻めに関して特に注目されているのが、日本三大水攻めの一つとされ、三成の戦下手を印象付けることとなった、総延長二十八 km に及ぶ石田堤による水攻めである。この水攻めに関して本書では、三成が秀吉の高松城攻めを真似て行ったものとされているが、実際は秀吉からの命令といわれており、三成自身はこの水攻めに対して批判的であったとされている。

それはさておき、忍城水攻めが失敗した理由として、水攻めに利用した利根川の水量が貧弱だったことや、その後の増水により堤が決壊したこと、堤防の建築に携わった農民の中に忍城方の息がかかった者が参加していたことなどが挙げられるが、本書では、農民から親しまれていた「のぼう様」こと長親が撃たれたことや、耕していた水田を台無しにされたことなどが、城に入らず城外で堤作りに雇われていた百姓の逆鱗に触れたことが理由とされている。

ではなぜ長親はここまで領民に慕われていたのか。理由は二つある。一つは彼自身が何もできないこと。運動は滅法苦手で、馬にさえ乗れず、とても不器用なため、自分たちがいなければのぼう様は何もできないという一種の義侠心が百姓たちを突き動かす要因となっていた。もう一つはとても誇り高い人物であったこと。民百姓とも分け隔てなく接することのできる度量の広い人物でもあり、このため百姓・足軽等、身分の低い者たちからは非常に慕われていたのだ。これは、長親の幼馴染でもある正木丹波守利英をはじめとする家臣たちにも同様に言えたことで、これにより三成が率いる大軍から城を守り切ったのである。なお、実際に長親が無能であったとする史料は、私が知る限りではどこにもないことを記しておく。

成功する人は、それだけ特別な能力を持っていることが多いかもしれないが、たとえその様なものがなくても、誰かから慕われるだけでも十分強くなれることがこの本から学んだことである。この先どのような人生を歩むか、その指標の一つになったと、そう思うようになった。

最後に、当時の面影を残すものは、三成の本陣から伸びる石田堤の一部のみである。

行事報告 平成26年度ブックハンティング

学生会 文化環境委員長

渡邊優樹

今年度の第2回目のブックハンティングが、11月26日に（水）に開催されました。後期中間試験の最終日の実施でした。最終日の実施で参加してくれた人からは疲れを感じました。参加してくれたのは1～3年生で、真剣に本を選んでいました。

高専での授業で役に立つ専門書を選ぶ人、気になる本を選ぶ人などさまざまでした。

学科が違くと受けている教科も違い購入している参考書をみても内容の分からないものがたくさんありました。

予算は1人1万円でしたが専門書には高価なものが多く、どの本を買うかとても迷いました。また他の人と協力して高価な専門書を購入している人もいました。

なかなか普段買えない本を買うことができる機会なのでぜひ楽しみにしてほしいと思います。

なお、ブックハンティングに必要な経費は後援会から支援していただいています。

ありがとうございました。



ブックハンティング図書紹介

—第1回5月28日—

年間日本SF傑作選 量子回廊

K. N.

新しいジャンルを読むとき、知らない作家の作品を読むとき、手っ取り早いのは短編集を読むことです。合うかどうかはすぐにわかり、何度も挑戦できるからです。これは日本SFの「傑作選」。ぜひ読んでみてください。

7つの習慣最優先事項

K. K.

時間の有効な使い方を考え直したいと思い、この本を選択しました。本書では、人間の活動は緊急性と重要性から大きく分けて、4パターンに分類され、それに応じ優先順位を建て、行動することが重要だということについて、説明されています。詳細については本を読んでみてください。

RePUBLIC—公共空間のリノベーション

Y. U.

学校や公園などの公共空間をより楽しく、使いやすくするために理論・実践・アイデアの目線から見ています。公共空間を新しい目線で見ることが出来ると思います。

橋のディティール図鑑

Y. S.

教科書には載っていない、見たこともないようなヨーロッパの構造の橋が載っているところに興味を持った。

あなたが生きる今日が素晴らしい

「自分のまわりや自分の中であたりまえにあるものほど大切なものはないんやな。」幸せは何気ない毎日や普段そばにいる人との間にある、そんなことを気づかせてくれる一冊。

—第2回11月26日—**素粒子について**

G. S.

物理学会や化学学会で陽子や中性子をつくっているもの、いわゆる素粒子についての研究が近年急速に発展しています。

まだこの素粒子には謎と未知なる発見があると思います、又、将来こういった研究職につきたいので、この本を購入させていただきました。

コンテナ物語

Y. I.

この本はMicrosoft 社創業者ビル・ゲイツ氏が薦めていた本です。ビルゲイツ氏が言うには「この本によって地味なコンテナへの見方が、180度変わった」ということに興味が惹かれ選びました。

校庭の昆虫

H. O.

幼少の頃から昆虫観察が好きで、同様の趣味を持つ方の情報源になればと思います、選びました。また、本書は非常に身近な環境に生息する種を掲載しているので、今日の無い方でも、その多様性を理解して頂けると思います。

BeagleBone Black で遊べるサーバを作ろう!

K. N.

Linux ボートは RaspberryPi が有名ですが、この BeagleBoneBlack は RaspberryPi より高性能な二番手として存在しています。こちらも試してみましょう。

高周波技術の基本と仕組み

K. N.

この本はこれから自分が高周波の分野の理論の習得と研究を進めていく上で、最低限理解しなければならぬことが簡単に分かりやすく書かれてあったため選びました。

数学ガール

Y. F.

普段見ない数学から数学の美しさに触れることが出来る。

へんな毒すごい毒

Y. Y.

毒というのは人類にとって危険なものでもあり、逆に薬のような効果をもたらすものもあります。そのような身近にある毒について知りたいと思いこの本を選びました。この本では様々な毒に関する事柄などを科学的にやさしく紹介しています。

広島県の歴史散歩

R. S.

この本は、広島県内すべての地域の歴史について書かれています。新たな発見があると思います。1度読んでみてください。

オシロスコープ 入門

Y. N

電気情報工学科の実験ではオシロスコープを使う機会が多く、最初はその使い方に苦労しました。この本はオシロスコープの基本的な操作方法やその仕組み、さらにはリサージュ図形などの応用の分野まで解説しており、役に立つ一冊です。

ZigBee/Wi-Fi/Bluetooth 無線用 Arduino プログラム全集

T. K.

貰った Arduino を使って何か面白いことができな
いかと考えていたためこの本を選びました。家に帰
ったら部屋の灯りをつけるという例があったので、
スマートハウスのようなものを自作できたら面白
いかと思いました。

すべてがFになる

T. S.

「理系頭脳」をもつ女子大生・西之園萌絵と、工学
部建築学科准教授・犀川創平が、密室・猟奇殺人の謎
に挑む理系ミステリーです。
文系のためではない、「理系エリート（自称）」のため
の推理小説です。

アンブローケンアロー 戦闘妖精・雪風

T. M.

戦闘妖精雪風の続編です。謎の異性体ジャムとの
戦闘により生まれた戦術電子偵察部隊。そこに所属
する人の心を失った彼とそこに在る完全自立制御
が可能な戦闘機スーパーシルフ。機械とは何かを考
えさせられる作品です。



お知らせ

貸出回数上位ベスト10

(調査対象期間:平成26年10月1日~平成27年3月31日)

順位	題名	著者	回数
※ 1	Vol. 1; TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	15
2	Vol. 4; TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	13
3	Vol. 5; TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	12
4	[本編]; 死ぬまでに行きたい世界の絶景	詩歩	9
5	光センサとその使い方: 種類・特徴・回路技術	谷腰欣司	8
5	日本編; 死ぬまでに行きたい世界の絶景	詩歩	8
5	本当に旨いサンドウィッチの作り方100	ホテルニューオータニ監修	8
8	4; ラヴクラフト全集	H.P.ラヴクラフト	7
8	6; ラヴクラフト全集	H.P.ラヴクラフト	7
8	新TOEIC TEST英文法出るところだけ!: 直前5日間で100点差がつく27の鉄則	小石裕子	7
8	TOEICテスト究極の模試600問	ヒロ前田	7
8	おとなの教養: 私たちはどこから来て、どこへ行くのか?	池上彰	7
8	明日の子供たち	有川浩	7

DVD利用回数ランキング

(調査対象期間:平成26年10月1日~平成27年3月31日)

順位	題名	No	回数
※ 1	アナと雪の女王	630	4
2	風立ちぬ	599	3
2	シュレック 2	234	3
4	もののけ姫	536	2
4	千と千尋の神隠し	104	2
4	ナイトミュージアム(1&2パック)	518	2
4	チャーリーとチョコレート工場	305	2
4	シュレック	112	2
4	プロジェクトX II-5 町工場 世界へ翔ぶ	85	2
10	テルマエ・ロマエ	586	1

編集後記

第57号がやっと出ました。前号に続いて、読書感想文特集号です。併せて、ブックハンティング(2回分)の様子もお伝えします。これからも、たくさんの本との出会いを応援します。